

ふみの会 ニュース

■発行 　ふみの会広報部
 ■発行日 　2005年10月26日
 ■連絡先 　藤川博樹
 　　　　　〒115-0045
 　　　　　北区赤羽1-48-3-203
 　　　　　tel03-5249-5797 fax03-3901-6090
 ■編集 　中井、塚原、藤川、蒲原雅、佐藤、蒲原直

<http://www.mdn.ne.jp/~fumi/top.html>

No.288

12月行事日程

■ニュース編集

原稿はテキストにして下記へ
 ワード、一太郎文書も可
 kamo@sun.email.ne.jp
 エッセイ:5枚(2000字)
 小説:10枚(4000字)
 詩、評論、書評:5枚 目安

■例会兼忘年会

12月16日(金)16:00
 四ツ谷地域センター 11F
 地下鉄丸の内線
 新宿御苑下車徒歩5分

ふみの会ホームページ

訪問者表示数GuestBook

会員用掲示板Members

NEW ふみの会ニュース287号 発行 2005.10

◆巻頭コラム「韓国サティアン」	蒲原雅人
■連載空想 おれたちの村 10回	蒲原ユミ子
■連作短編 異海市凡日録 8 一筆露姫	蒲原直世
●エッセイ 空木岳に登る(二)	中井 豊
●エッセイ 途かなる戦火(八)	内田幸彦
□連作小説 ヒカル君の冒険 6	藤川博樹
★音楽エッセイ モーツァルトの『クラリネット協奏曲イ長調』	浅本文彦

PDF版バックナンバー
 ※PDFの閲覧にはパスワードが
 必要です。ふみの会ニュースを
 読みたいとき同時にパスワードを
 発行しています。

287 (1.5MB)
286 (1.4MB)
273 (0.4MB)
272 (0.35MB)

同人のサイト
 蒲原雅人 ホームページ
 蒲原直世 ホームページ
 塚原由紀夫 ホームページ
 藤川博樹 ブログ
 中井 豊 ブログ

「ふみの会ニュース」の購読を受け付けています。(1200円/年) -> 申込はこちら
 mailto:fum@mdn.ne.jp

工房聞天 電話とマンガの制作 マイロデザイン 中井豊・藤原直世

藤川博樹氏の奮闘でふみの会ホームページができました。アドレスは上記。

さすらいの詩人

わたしはよく電車を乗りすぎたり、違う駅で降りたりする。

電車の中に大事なものを置き忘れることも多かった。ぼうつとしているのだろう。

でも、最近はそのようなことがなく、少しはしっかりとってきたかなと思っていたのに、きょうは違う電車に乗ってしまった。どうも景色が違うし、なかなか着かないので気がついて慌てた。

(もう時間に間に合わないけど、しかたがないな)と観念したら、隣の席の男性の手に目がいった。彼ががみこんで必死に何か書いている。

視界20センチ、つまりド近眼のわたしなのに、文章が目飛び込んできた。(だから、わたしのせいではないよ)

広告の裏に、やや大きめの字でびっしり書かれていた。「秋桜」や「青い空」がピンク・緑・青色のボールペンで書かれていて、美しかった。パソコンでの画面で文章を編集する時に使う色文字を見ているようでもあった。

男性はサラリーマン風ではなく白髪混じりの蓬髪で、哀切とロマン漂う内容からして放浪の詩人かなあと思った。

電車を乗り違えたのは、彼に遭う為のような気がしてきた。

(ユミ子)

■ 巻頭エッセイ

ほんものの教養

蒲原雅人

■ 過日、津久井のレンタルDVD・CDショップ兼の大型書店で、岩波文庫の安売りに出くわした。日本ではなくてすべて新刊である。それがいちように1冊50円でカートに盛られ、売られていたのだ。手持ちの現金に余裕がなく、限られたものしか求められず、後悔している。わたしが買ったのは以下の書籍である。

○『コウリッジ詩集』

上島健吉編 660円

○『木馬と石牛』

金関丈夫著 大木太良編 670円

○『草の葉』上中下

ホイットマン著 酒本雅之訳 760円と700円

○『朝鮮民芸論集』

浅川巧著 高崎宗司編 700円

○『おもものそうし』下

外間守善校注 900円

○『玉造小町子壮哀書(小野小町物語)』

栃尾武校注 570円

これをわたしはぜんぶで300円で手に入れたのである。カートのなかのものをすべて買ったとしても1万円にはならなかっただろう。なぜあのときいくらかも余分に金を持っていかなかったか、かえりかえりも残念であった。ほかにトロツキーの『ロシア革命史』などの大著があり、とつてかえして、とも考えたものの、車での往復を思えばあきらめるしかなかった。この大型書店が岩波文庫愛読者のためにこんな安売りをやってくれたのではないことは、もちろんあきらかたではない。それは単純に書棚にマンガ本用のスペースをつくるためだった。岩波文庫といえは書店側の買い取りというところで知られている。つまり、書店は先に支払いを済ませて仕入れているのである。それなのにこの書店はマンガのためのスペースを確保するほうが岩波文庫を置くよりましだと判断したわけだ。書

店にプライドを要求するのはばかげている。こうなるにはこうなるだけの原因がある。それは戦後の長い時間をかけて国民の白痴化が計られ、それが成功しているということだろう。国民白痴化については2面があると思う。ひとつは、70年代にイザヤ・ペンダサン(山本七平)や渡辺昇一などの筆にも棒にもかからないような非文化人が言論界に組織的に動員され、教養主義の崩壊が盛んに唱われたこと、もうひとつは、持ち家政策の推進によって国民は絶えまない経済活動に組み入れられ、健全な余暇を奪われたこと、があるのではないか。わたしにはこの流れは大筋では変っていないようにみえる。震度5強で崩れるマンションを買ったひとたちの真の哀れさは、そのひとたちもまたシステムの形成に参加しているということにあるだろう。なんでも民営化すればよい、という小泉政治を支えたのは、ほかならないそのひとたちだった。教養の崩壊が建物の崩壊そのものであることに思い至らないとすれば、システムの再構築もまたありえない。

■ほんものの教養は国民の白痴化には無関係にそれ自身で輝く。そして慈愛深く人々の目覚めを待つ。たとえそれがどれほど時間がかかろうとも、その教養は死にはしない。けして滅びもしない。こころみに、『朝鮮民芸論集』浅川巧著 高崎宗司編をひもとこう。ここにある最上級の日本語を国民は簡単に手放してはならないだろう。支配層ができれば抹殺したいと計る教養のなかみを、ここではつぶさにみるべきだ。感じるべきだ。「筆者はしばしば老練な匠人らの仕事場を訪れその熟達した手先の働きを飽かずに見守って時の移るを知らないことがある。そこには特別な器具も複雑な設計もなくして仕事は淀みなくすらすらと進捗する。急ぎもしないが躊躇がなく自信のある運びである。その長煙管を噛んだ自鬚の間かしの無理もないように見られ、実に平和な姿である。人には一面働き蜂のように工作とか生産とかいうことに本能的に興味を有つ性質があるように思う。しかしそれらの興味は何時の間にか資本というようなもの占有する不当な特権のために蹂躪されて

しまった感がある。そして残るものはすべての人の上にかかる生存上の不安のみである。その不安は人の作るあらゆる物の上に現れている。従つて不快な作品が世を毒するのでなくて、不健全な世相が奇形児を生んだのである。何仕事でも終生倦まずに働き通せたらその人は幸福だと思ふ。人類全体もその人からお蔭を蒙ることが多いであらう。けれど資本の向うを張る労働でなくて資本があつてもそれに自由にされない仕事、またなくとも勝手に仕送られる仕事でなくては人間に平安を来たらさないであらう。現在の機械工業において職工は年寄れば殆ど廢人同様になる。これは職工ばかりでなく現社会のあらゆる階級において見る現象であつて、人は仕事の興味を終生つづけることが出来ない約束が出来ている。然るに従来の人からは幸福に仕事をしたように思える。こんなことを考えながら年寄つた匠人らの働く手さを眺めると、吾々の生活を净化し奮起を促す不思議な力を感じる」〔1929年(昭和4年) 日本による朝鮮の植民地支配と、朝鮮における日本人の

ごう慢なふるまいを深く憂へ、朝鮮の人のびとのなかに入つていつて、その民族の造り出す美を誰よりも愛し、伝えていつた浅川巧の生涯は読むものに感動を与えずにはおかない。浅川巧は山梨県出身で、最近、県内有志の協力によつて伝記映画が製作される運びになつたと聞いている。成功を祈らずにはいられない。■11月23日「朝日新聞」4面に中曽根康宏元首相のインタビューが掲載されている。いいたいほうだいである。自民党に対する国民の支持は自然発生的に芽生えたのではなく、米國主導によつて周到に計画され、莫大な金が投ぜられたからであり、抵抗するものにはあからさまな弾圧が加えられたからである。さまざまな謀略によつて自民党支配は形成されたのであつて、政治の上澄みだけをすくつてさも清浄であるかのような言質を巡らすのは自身謀略家でもある中曽根らしいといへばいえるが、さまざまな疑獄事件をたくみにくぐり抜けた政治家としてみるならしらしいといへるだろう。危険なのは中曽根が政治に「規律」を取り戻すという名目で、戦

後せつかく取り払つた国家的宗教概念をまたもやこの邦にもたらそうとしてゐることだ。この男の教養人ぶりの似非かげんはつと知られているが、なにかといへばそこにレトリックの微粉をまき散らし、教養らしさを付け加える。似非知識人たちの手法そのままで。こんな嘘つきみたことないが、ほんものの教養は遠からずその化けの皮を必ずや剥がしてしまふことだろう。

書評

高木貞治著『近世数学史談・数学雑談』(共立出版)

◆十九歳の青年ガウスが正十七角形の作図可能なことを整数論の研究を通じて証明した折りの日記に始まる本書は、数学に携わる人なら必ず繙いたことがあるに違いない。◆数学も人間の文化的な営みの一翼であつて、その歴史には人間のドラマがある。しかし、建築と同じように、建設現場の様子は普通には窺い知れない。◆受験数学に感動がないのは、その問題が人工的なパズルのような、それきりのもので、発展性がないからだ。眞の数学は、天与の自然な課題に取り組む。そのため、長期間にわたつて暗中模索が続くが、解明された後には、新しい世界が開ける。そして、次の課題が見えてくる。◆それにしても、数学研究の様子は伝えるににくい。それを、数学者の日記や手紙を紹介しながら生き生きと伝えてくれる稀有な本が『近世数学史談・数学雑談』だ。著者の高木貞治は日本のガウスとも言える大数学者である。その比類のない筆致は、読む者に強い感銘を与えずにはおかない。実際、一九三一年以来、この本は多くの人々の意欲を数学へと与へて止むことがなかった。◆本書を読んで、ガウス、コーシー、アーベル、ヤコービ、ガロア、ゼリクレといった天才たちの努力を垣間見るとは、少なくとも人間を深く考えることに繋がるだろう。

おれたちの村

⑪

佐藤ユミニ

9 肝だめし

まちに待った夏休みがやってきた。

そして、陽平たちの学校には、夏休みの初日に毎年肝だめし大会がある。このどきどき行事は、先生方のサーブスだ。参加できるのは、3年生以上。陽平は

ひまだし、母ちゃんにもすすめられているので参加を断る理由がない。ほんとうは行きたくないのだが。

見かけによらず、陽平は暗いところが苦手である。夜中におしっこが出たくなつたとき、古い家のはじっこにあるトイレの窓がこわいので、弟のケントを起こして連れていっているくらい。

夕方の7時、校庭の朝礼台前に50名ほどの子どもたちが集まった。

先生方は全員いる。といつても、保健の京子先生もいれて10人である。担任の桜田先生は黒っぽいシャツとジーンズ姿で、街のお姉さんのような。

陽平と一番気の合っているヒロキは、お母さんの実家に行ったので来ていな

い。3年生はクラスの半分くらいの参加だが、女子は圭子たち3人だけだ。

いよいよ、肝だめし大会が始まった。最初は、おきまりの「こわい話」。校長先生がやる。小太りで額がはげ上がった丸い顔の校長先生は、そのへんの「おとつあん」とかわりない。

だんだん夕暮れがしのびよってきた中、校長先生は蜀台に立てた太いロウソクを朝礼台に置き、自分はその斜め前に立った。校長先生の顔は、ほっぺたと鼻が光にあたり、目元が暗く落ちくぼんでぶきみだ。校長先生はにたりと笑ってから言った。

「きようは『白い手』というお話だよ」
そして、自分の片手をぬおうつとローソクの炎にかざし、ちよつとゆらしてから引っこめた。それだけで、会場のこわいふんいきが盛り上がった。夕闇せまる校庭で、校長先生は体育座りをしたみんなの目を見ながら話し始めた。

「むかし、あつた話だよ。
村のきれいな娘さんと若者が好きになりおつた。2人はいそがしい田んぼ仕

事の合間をぬつては、湖のほとりで会い、しあわせなひとときを過ごしておつた。

ところがなあ、しばらくして若者の方が町の暮らしかあがれてしまい、村を出ていきおつた。娘さんには、『かならず帰ってくるから』と言いいおいてな。

しかし、3年たつても5年たつても若者はもどつてこん。それで、悲しんだ娘さんは若者と楽しく語り合っていた湖に身を投げて死んでしまったと。

何年もたち、村人はかわいそうな娘さんのことはわすれかけてきた。

ある夕方、村の男衆が湖の側を通つたときのことだ。お日様が暗い銀色で湖を照らしている。何気なく、男衆が湖を見らると・・・」

校長先生は一息ついてみんなを見渡した。みんなは息を呑んで校長先生を見つめている。校長先生は、ゆらゆらゆれるローソクの炎の中でぎよろりと目をむいてぶきみに笑つた。

陽平はぞつとした。
校長先生は片手を軽く握つて腹の前におき、

「湖からにゆうつと・・・」

と言いながら、ゆつくり顔の前で広げた。

「ギヤアツ！」

思わず女子が声を上げた。校長先生はもう一度手を顔の前におき、

「白い手が・・・」

片手を広げる。

「にゆうつと・・・」

「ギヤアツ！」

「それからも、夕方、村の男衆が通ると一息おく。子どもたちはかたずを飲む。

「にゆうつと、白い手が・・・」

「ギェツ！」

それを何回かくり返し、みんなが十分こわがつたので、校長先生は満足して話を終わらせた。

「このへんにもたくさん用水があるの
で、みんなも気をつけるのだよ」

さて、いよいよ肝だめしである。

女子と男子がペアになって行く。体育館の後ろから山道に入る。50mほど登つた所に六地藏様がならんでいらつしやる。そこに、前もつて先生方がおいた

「お札」を取り、ブナ林をぬけて学校にもどる。つまり、学校の後の山道を一周するのだが、体育のマラソンでよく走っている慣れたコースでもある。しかし、昼と夜ではまったくふんいきが違う。ペアの決まった6年生から出発して行った。前の組が見えなくなつて大分たつてから次が出る。出発係は京子先生だ。女子といつしよに行くのを照れている男子に、

「おぼけが出そうなどころでは、しつかり手をつないであげるのよ」と、あおっている。

3年生は女子の参加者が少ないので、桜田先生は陽平と泉をペアにした。陽平は、「(圭子と組むよりいいか)と思うことにした。

順番を待ちながら、守たちと暗いところで相手の足ふみをしたり、砂飛ばしをしたりしていた。

ようやく、陽平と泉の順がやってきた。一番最後だったので、あたりはずつかり闇につつまれてきた。しかし、この山里にはネオンがないので、星空が美しい。南の空に満月に近い大きな月がかかり、夏の代表的な星座のさそり座も姿をあらわしている。京子先生に、

「おぼけにユーカイされないように

ね！ もう後からだれも行かないから」と、からかわれて、2人は出発した。

いちおう、それぞれ懐中電灯を持っているけれど、もう目がすっかり闇に慣れているので、山道そのものは全然あぶなくはない。マラソン練習で足がこの道に慣れているので、転べという方がむずかしいくらいである。

問題は、暗い闇である。月が照っている分、影がこく、暗い部分は見えない。そこに何かいるかもしれない。そして、山道はせまく2人ならんで歩けないので、どちらかが先に歩かなければならない。

泉はプール事件で陽平にみっともない姿を見られているので、もう見栄をはって先頭を歩く気はないようである。陽平はしかたなく先に山道に入った。

懐中電灯をつけると、自分たちの方が闇に浮かび上がって目立ち、オバケが近よってくるかも知れない。それに、懐中電灯で暗闇にひそんでいる変な物体を照らし出してもこわい。だから、陽平は



無灯火でそろりそろり山道を登っていた。泉も懐中電灯を使わずに陽平の後をついてくる。

月明かりでこうこうと照らされた山は物音はしない。けれど、なにかこの世の者ではないものたちの息づかいがするようで、陽平はもう最大級に緊張し、心臓がドッキンドッキンと破裂しそうである。

肝だめしのコースではないが、近くに湖もある。昼間、マラソンしながら見ると、「きれいだなあ」と思うが、夜はいやである。さつき校長先生からこわい「白い手」の話聞いたばかりだし。

ようやく、六地藏様までたどりついた。桂の大木がそびえている手前にいら

つしやる。

地藏様の前は暗い。先生方が用意したお札はどこだろう。泉が懐中電灯をつけ、一番はしのお地藏様の前から札を取り、陽平に見せた。

白い紙に太いマジックで女の人のゆうれいがかかっている。陽平が、(気持ち悪い絵だなあ)と思ったとき、襟足に

冷たいものがぬらっとさわった。ギヤッ！

と叫ぶなり、陽平は一目散にすつとんでブナ林を通りぬけた。

学校の街灯が見えるところまで来て、陽平はやつとストップし、ハアハアとげしく息をついた。もう少し行くと、肝だめし大会のゴールである。ひとり帰っていくのはまずいと思っていいたら、泉が追いついた。

無様な姿を見せちゃったので、陽平が観念していると、泉はいつものクールさで言った。

「さっきのは、桜田先生のしわざだよ。棒にひもをつけて、こんにやくをたらしてた」

(ちえつ、やられちゃった・・・)

陽平は苦笑いして泉を見た。泉も陽平に、初めて笑い返した。目がアンバランスにたれ、ひょうきんな笑顔だった。

(以下次号)

カブ畑のイエス

蒲原直樹

混沌市の南部は田園地帯そのものだ。各駅停車しかない私鉄が海へ向かって頼りなげに延びている。十六号線を除けば二車線の道路はほとんどない。県道を少し外ればそこには田畑と森が続いている。そんな田園の集落でもクリスマスが近づくと慌しくなる。カブ畑にミサ曲が響く。

「ユカリちゃんのお腹が大きいみたい」
そんな噂が混沌市明神団地のオバサンたちの間に広がり、ユカリの母親の耳にまで届いたときには娘はもう妊娠八ヶ月という取り返しのない時期に入っていた。太めの子なので毎日見ていると変化に気づかなかったのだ。

「どうしよう」母親は頭を抱え、父親は激怒した。しかしユカリは二五歳という年齢ながら精神年齢は三歳しかない知恵遅れの娘だ。問い詰めても、腹の中の子どもが父親が誰なのか答えることは出来なかった。

「あの子はハア、頭は子どもだけんど、体は立派な女だからなあ」

父親の告訴を受け付けながら混沌市

部警察明神分署署長はつぶやいた。実は署長は両親の知らないユカリの行状を細かいところまで知っていた。

知恵遅れの娘は母親の目を盗んで時々集落の中やカブ畑をうろついた。そして彼女をからかう男たちとじゃれあつて遊ぶのが楽しみだったのだ。中には部屋の中に連れ込んで、けしからぬ行為に及んだ男もいたらしい。ちょうど八ヶ月前の寒い時期、やはり若い男の集団がユカリを空き家へ連れ込んだという情報があった。署長はその情報を無視した。今時どこの警察もそんな子どもたちの桃色遊戯を取り締まっている余裕はないからだ。しかし告訴という事態になつては無視し続けるわけにもいかなかった。彼は混沌市立明神中学校に連絡し、校長と面会した。

「その集団の中におたくの生徒がいた、つう目撃者がおりました」

「平野満男ですか？」

校長はやぶにらみの目玉をぐるぐる回してそう言った。

「よくわかりで」

「署長さんから連絡があつて、さつそく聞いただしてみましたが、彼はやつていないと言っています」

「やつていない？」

「イタズラしたことは認めました。でもレイプはしていないと。……ユカリって娘は他にもいろいろあつたそうじゃありませんか。満男たちだけが疑われる理由はないでしょう？……あの子はそんなひどいことの出来る子じゃないですよ、ケンカつ早いけど根は優しい子です。私はそう信じています」

署長はため息をついた。クリスチャンである校長の信念は立派だがことは個人の信念を越えている。

「残念ですが、事情聴取はせんけりやありません」

署長が言うのと、今度は校長がため息をついた。

平野満男がゲロして当時の不良グループ全員の氏名が割れた。公立中学二人私立中学二人の五名で、彼らは一人ずつ警察に呼び出され、事情聴取を受けた。

「オレら、パンツは脱がしたつすよ。毛

が濃くてさア、おまけに足が太いんで股が開かねえでやんの。だからどこに穴があるんか分かんかったつす。みんな突っ張つたけど、いざとなるとビビつて、誰も入れられなかったと思うよ」

「やつぱり可愛そうだって思つていたしき、それに不潔なんだよあの女。オッパイ触るとか、いろいろ楽しんで、ヤリたいと思つていたヤツはいないんじゃないかな。オレたちつてけつこう好みがうるさいんすよ」

私立の生徒たちの陳述が実情を示していた。他の中学生たちの証言も似たり寄つたりだった。少年たちの婦女暴行・強姦は未遂であると判断され、彼らは嚴重叱責の上全員釈放された。それから集落に棲む助平な老人やフリーターの青年らが拘束され、尋問されるという事態が続いた。しかしいづれも決定的な証拠は出ず、捜査は停滞した。署長始め、警察の捜査態度も問題だった。

「こんな事件は難しいやねえ、そもそも事件なのかどうか……今の時代に子どもが出来るなんてこたア、むしろ、おめでたいじゃんねえの？」

そんなやる気のない捜査員の話も伝わってくる有様だった。

ユカリが臨月を迎える十二月、明神中学では終業式で校長が講話した。

「この学区で不幸な事件が起こりました。不名誉なことに、本校の生徒も関わっていました。私はみなさんに、人の尊厳というものを考えてほしいと思います。……知恵遅れの人にも人権があります。抵抗できない、しないからといってイタズラしたり、好奇心の対象にしてはいけません。明日はクリスマスですが、この日にお生まれになったイエス様は、弱いものへの愛を説かれました。あなたたちにも弱い時期があったはずです。その時に守ってくれる人がいなければ、あなたたちはここまで育つことは出来なかったでしょう。それを忘れないでください」

校長は居並ぶ生徒を悲しげに見回した。その時ばかりはロンパリの目玉がロンドン・ベルリンくらいに近づいて見えた。やぶにらみの顔はどこか怪しい印象を与えるのだが、この時の校長の真剣さはそれを越えるものがあった。

「もつと大事なことは、生まれてくる子どもには罪はないということだ。父親

のわからない子どもでも人間としての権利は、両親の揃った子と同じようにあるのです。イエス様も父なし子として生まれました。だからこそ、弱いものへの愛に目覚めたとも言えるでしょう。もうすぐ生まれてくる子どももイエス様と同じように、大きくなって世界を救う人もおられませんか。どうかみなさんも、その子の将来を優しく見守ってください」

いつもは辛らつな野次をとばす子どもたちも、この日の校長の訓話には黙って聞き入った。停学中の平野満男はこの訓話を聞くことはなかった。そしてユカリはクリスマスの朝に男の子を産んだ。

明神中に五人の不良少年たちが押しかけてきたのは正月を過ぎた始業式だった。

「校長を出せ」平野満男が叫んだ。

「あの偽善者、ふざけやがって、てめえが犯人のくせにオレたちを警察に売りやがった」

「どういうことだ」

応対に出た教頭に満男が携帯電話の液晶画面を見せた。そこにはやぶにらみの乳児が映っていた。

「これがユカリの産んだ子だ。この町でこんな目ン玉してんのは校長だけだ。産

婦人科の看護師さんたちも大笑いだよ、その中の一人がオレにメールで教えてくれたんだ。ユカリ孕ませたのは校長だ！」

「待ちなさい、君たち……」

五人は教頭を押しつけて校長室へ向かった。いつの間にか大勢の生徒たちが職員室廊下の内外に集まってきた。五人が扉を叩く前に校長が出てきた。

「なるほど、これでは疑われても仕方がないな」

写真を見た校長は余裕の態度で笑ってみせた。

「困ったことだが、私には身に覚えがない。うちには子どもがいらないが、それは私に子どもを作る能力がないせいだと医者と言っている。だからこの子が私の子であるはずがないんだよ。しかしまあ、これも神の思召しかもしれない。この子を引き取って、うちで育ててもいい。クリスマスに生まれた子だ、きつといい子になるよ」

そう言われてさすがの不良少年たちも沈黙した。生徒たちは完全に納得はしなかったが、表立って校長を指弾するものはいなかった。彼らは教室に戻った。しかし明神分署署長は騙されなかった。

「明神産婦人科の院長先生に聞いてみ

たら、ハア、あんだに子がねえのは奥さんの子宮後屈のせいだつて言ってたべさ。ウソついちゃうまくねえな、なんなら遺伝子検査してみつか？」

分署の取調室でそう言われて校長はうなだれた。

二月の末の休日、自宅の裏で泣き声が出た。妻は外出していたので校長が出てみるとドブに落ちて泥だらけ、全身ずぶ濡れになって震えているユカリがいた。

「さあ、おいで」

校長はユカリを浴室に招きいれ、全裸にして熱いシャワーをかけた。最初は無心だったのが、若い女の真つ白な裸体を見ているうちに欲情してきて、いけないと思いつつ尻を抱えてしまった。ユカリの衣服はざつと洗って乾燥機で乾かし、元の通りに着せて裏口から出した。「バレルるはずはない」と思ったのにこんな結果になってしまった、神を裏切った罰だ、と彼は涙ながらに語った。校長は当然にも懲戒解雇となり、混沌市から姿を消した。ユカリの両親には賠償金が支払われ、子どもは校長の妹夫婦が引き取ったという。

空木岳に登る(三)

中井 豊

朝食をとり、ずっしりした小屋のオニギリ弁当を受け取って、すっかり明るくなつた中空木岳頂上へ二〇分ほどで登り直す。寒いので、フリースの上着を重ねて歩く。今日も上天気のように。御嶽山の全容が朝日を受けて美しい。

尾根を歩くこと約一時間で、最初の目標、赤柳岳(二七九八m)へ七時二五分に着いた。棒が一本立っているだけのピークだ。まだ先は長い。

いったん下降してから南駒ヶ岳を目指す。昨日来、いつも見えていた大きな山だ。尾根につけられた細い登山路を黙々とたどる。辺りはハイマツなどの低木だけで、空が広くて素晴らしい展望だ。南駒ヶ岳の頂上(二八四二m)は、北アルプス燕岳と同じ花崗岩質の岩と砂である。岩陰に小さな祠がある。屋根だけが新しい。時刻は八時一〇分。木曾駒ヶ岳、宝剣岳が陽を受けてハッキリ望める。晴れ渡った背後の空には羽毛のような雲が少し見える。風はすっかり止んで次第に気温が上昇してきた。

地図によると、南駒ヶ岳から南下して越百(こすも)山に到る間に、二七三四mと二五六一mの二つのピークがあつて、前者に「危険」のマークがある。す

ぐ横に「登降注意」と赤で印刷されている。実際は、整備された尾根道の上り下りなので、鎖とロープがあつて、慎重に歩けば大丈夫だ。

一二時一五分、いよいよ最後のピークである越百山(二六二一・二二一m)に着く。休み休みのんびり歩いたためか、コーズ・タイムの倍くらい時間がかかった。木の標識には「越百山」とだけ大書された厚い板が掛かっている。墨の跡が長年の間に風雨にさらされて浮き彫りとなつている。ここで私達は縦走路に別れを告げ、下山道に入る。

三〇分ほど急坂を下ると樹林帯に入り、越百小屋に着く。小屋番のオヤジさんの姿があり、その奥さんが洗濯物を取り込んでいる。奥さんは名古屋に住んでいて、週に一度だけ様子を見に来ると言う。オヤジさんは娑婆には住めない男なのだろう。

さらに四時ほど下りに下り、登山口駐車場までたどり着いた。めつたにない好天に恵まれた静かな山行(さんこう)になった。

自動車に乗って、まず私達は須原(行)き、《もみじ荘》の鍵を返却した。一昨日の管理人さんは留守だったので、近所

の床屋さんに鍵を託した。暮色が濃くなる中、栈温泉で汗を流し、それから何か御馳走を食べようということになった。栈温泉は木曾川沿いに、国道一九号線からは文字通り懸け橋を渡った対岸にある。露天風呂からは国道を走る車の明かりが目に入る。ここでの夕食では馬刺を楽しんだ。

すっかり暗くなった国道を、私達はテントを張って泊まるため、田の原(御嶽山登山口の一つ)駐車場へと向かう。三人の体調がよければ御嶽山頂を往復して、その足で大阪へ帰ろうという計画である。

翌朝は周囲のざわめきで三時頃に目覚めた。おそろしく頂上で御来光を拝もうという登山者・信者たちだろう。

珍しく、嶋倉さんが、「人も多いし、シンドイから登る気がしなくなつた」

と消極的だ。そこで、御嶽山麓の王滝温泉へ行くことになる。

王滝温泉はひなびた林道の終点にあつて、配管からは硫黄泉がもれている。しかし、辺りに人影は見当たらず、土日だけの営業らしい。林に囲まれた、この静かな温泉に入ることは次回の課題となった。

やむなくスキー場の臨時駐車スペースと思われる砂利の敷かれた空き地で、

朝食にする。小さなハエのような虫が集まって来て、刺された皮膚が痒くなるので、あまりゆつくり出来なかつた。高原だからと油断できない。

そのまま帰るのは惜しいので、奇勝「寢覚之床」(臨川寺)を初めて訪れ、木曾川に横たわる巨岩の造形を眺めた。浦島伝説を偲ぶより、流れの水質が気になった。アジサイの咲く傍らに、

ひる顔にひる寝せふもの床の山
という石碑があつた。

芭蕉

それから、またまたJR須原駅前へ立ち寄り、「大和屋」で、店主の北川ふみ子さんのこしらえた名物——桜の花漬けをお土産に買った。国道を少し外れた旧街道に沿うこの宿場町(中山道・須原宿)は静かで、人々も親切だと思つた。帰阪の途につく前、鹿の湯温泉《かもしか荘》の鉱泉に入った。これが古くからある温泉(冷泉を沸かしたもの)だと聞いたからだ。最近になってボーリングされた温泉には風情が感じられないのである。

《かもしか荘》までは山村を縫うような道だった。一〇時過ぎ、着いてみると私達の他にお客はおらず、建物全体がひっそりしていた。こうして空木岳登山の最後をすがすがしい思いで過(こすも)つてきた。(おわり)

中井君と出会った頃(一)

瀧本文彦

初夏の風がさわやかに教室へ忍び込む朝だった。私は高校三年生だった。行われていたのは何の授業だったろう。一階の音楽室からモーツアルトの『トルコ行進曲』が聞こえてきた。

『いい曲だなあ。僕もこの曲が弾きたい……。うまく弾けるようになったらなあ』と、授業そつちのので聴いた。誰が弾くのか——おそらく教育実習に来ていた先生だろうか。その演奏は細かいフレーズで一寸躓き、全体に少し硬かった。でも、十分に楽しめた。そして、楽譜を買う決心をした。

買うには、新宮市の楽器店まで車で一時間もかかった。店にはピアノ・ピースがあった。中からモーツアルトの『トルコ行進曲』を見つけた。音符の数がベートーヴェンやシューマンやショパンの曲より少なかった。

『おっ、これなら僕でも弾けそうだな』と思った。この楽譜は五〇円だった。早く練習したかった。帰りがもどかしかった。

(9) ニュースの会ふみ

やっと家へ戻り着き、コンクリートの

土間に入った。そこに置いてあったアップライト・ピアノの椅子に座った。当時、ピアノを弾くときは、いつも下駄を履いていた。楽譜を広げて右手でゆっくり第一主題を弾いてみた。タリタリタリ、タリタリタリ、タリタリタリタリタリ、まで行つたかなと思つた時、次の箇所でもう躓いた。

左手の伴奏は比較的やさしかった。しかし、弾き進むうちに惨憺たる『トルコ行進曲』になった。弾こう弾こうという思いが強ければ強いほど、肩に力が入った。肘にも力が入った。ピアノに向かつて格闘すればする程、手首が硬くなった。すると、指も動かなくなつた。独学の悲しさ、我流の惨めさを思い知らされた。『やっぱり『バイエル』から習わなきゃ駄目か』と思つた。

学校の音楽室には全部で三台のグラインド・ピアノがあった。一番古いもの、次に古いもの、授業に使う新しいものだった。休憩時間になると必ず音楽室へ駆けつけて古いグラインド・ピアノで練習した。

秋になった。夕暮れ、音楽室に籠もつてグラインド・ピアノを弾いていると、「熱心にピアノを練習しているね。男で珍しいな」

と二人の生徒が声を掛けてきた。見ると、細面で背の高い秀才らしい雰囲気の生徒だった。芥川龍之介の写真集を図書館で見たことがあつた。その中の一枚によく似ているな、と思つた。

「譜面を見ると、やさしそうなんだけど、うまく弾けなくてね」

と私は答えた。

「君に興味がある。家へ行つていいかな？」

と訊かれた。ちよつと困つたな、と思つた。まる一曲を披露できる曲はないし、秀才君が難しい話を持ち出しそうだし、私の家は小さく薄暗い家だし——十分な持てなしが出来ないのではないかと、思つたのである。『来られたら恥ずかしいな』とも思つた。それで、「いいよ」とは言わなかったが、彼は随いてきた。道すがら何をどう話したかは、ほとんど覚えていない。芥川龍之介に似たこの生徒は数学が好きだということだけ知つた。

「僕の名前は中井です」

と言つたので、

「瀧本です」

と答えた。しばらく歩いて家に着いた。コンクリートの土間で、下駄を履いて下手なピアノを披露した。

彼は下手なピアノでも一生懸命練習していた私と親しくなるうとした。無口な私は、人に会つたり、話したりするのが苦手だった。

中井君はいきなり数学の話をした。

「数学に美しさを感じる」

と言つた。私は分かつたような、分からないような顔をして頷いた。私は鈍才だったが、数学の理路整然とした美しさは想像できる気がしたからである。

「数学は情緒だと、岡潔先生が言っている」

と聞いて、私は何のことか分からず黙っていた。中井君は奈良まで岡先生に会いに行つたということだった。彼は岡先生と対座して、しばらく睨み合つたそう。その勇氣には驚いた。岡先生に、「頭の冬眠状態にはなさないぞうだ」と言われたそう。

中井君は、

「数学と音楽は親しい関係にある」

とも言つた。(つづく)

ヒカル君の冒険 7

藤川博樹

初めての買い物 豆腐を買う

ヒカル君ももう三歳になって、「お使い」ができるようになった。

町内会の回覧板をもつていくようにお母さんに言われて、隣のうちまでよろよろ歩いていった。

「かいらんばんだよ」

隣の家の玄関で、ヒカル君は大きな声を出した。誰もでてこないのもう一度、

「かいらんばんだよ」

と言った。

そしたら、隣の家のおじさんは、寝ころんでテレビを見ていたのだが、

「おお、そうか、おお、そうか」といって、あわてて出てきた。

「ありがとな、ちよつと待つててな」

といつて家の中に戻ると、袋に入ってたせんべいを持って出てきて、ヒカル君にくれた。ヒカル君は、モノには何でも名前があり、そしてどんなモノにでも持ち主があるというところを理解し始めた。ついで、大人から何かを

もらつて

自分の物

になるの

がうれし

かった。

お母さ

んは心配

で、自分

の家の玄

関の先か

ら、そつ

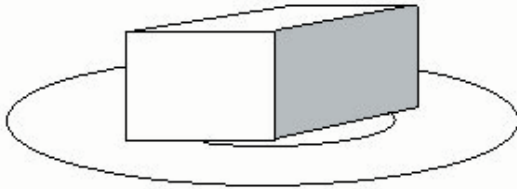
とヒカル

君の様子

を見てい

たのだが、

走つてきて、



「すみません。お使いできるかなと思つて」

とおじさんにお礼を言った。

次の日の夕方、お豆腐屋さんが来たときに、ヒカル君はお母さんに頼まれて、お豆腐を一丁買った。

お豆腐屋さんは、ぶあーと笛を吹いていつも夕方にやってきた。自転車の後ろに木でできた大きな箱を積んでいて、水の中からお豆腐を取り出してヒカル君に渡してくれた。お豆腐屋さんは無造作にお金をヒカル君から受け取つて、腰につけた皮のケースに放り込んだ。

それから、ヒカル君は、家の前の細長い道を、東の方へずっとずっと歩いていって、駄菓子屋で五円の甘いざらめ菓子を買つた。ざらめ菓子を食べながら、ヒカル君はとぼとぼとまた長い道を歩いて家まで帰つた。

お母さんは、ヒカル君が長い時間どこかに行つていたのと、何かをなめているのに気づいたが、何も言わなかった。男の子がどこか大人の目から見たらとんでもない遠くまで

歩いて行つてしまふことはよくあることだ。これまでもヒカル君が、家から歩いてどこかとても遠いところまで行つて、帰つて来ることはよくあった。ヒカル君が長い時間どこかに行つていて帰つてくると、お母さんはほつとしたが、そうそう心配もしていられないと自分に言い聞かせた。ヒカル君はとてもしっかりしていると思つたし、心配しすぎてヒカル君の冒険心や独立心を押さえつけるのもよくないと思つたからだ。

ヒカル君の周囲にはとてもめずらしくて興味深いことがとてもたくさんあつて、世界はふしぎなものが満ちあふれているように見えた。ヒカル君にとつても、まいにちまいにちがとても新鮮で驚きに満ちあふれていた。

翌日も、ヒカル君はお母さんにお金をもらつて、お豆腐を買つた。今度はお豆腐屋さんは、手のひらの中の小銭を見て、「五円足りないよ」と言った。ヒカル君は右のポケットから五円を出してお豆腐屋さんへ渡した。

デンキが切れる

隣のハルオちゃんが、おもちゃの鉄砲を買ってもらった。バネで飛び出した弾が、ガラス窓にピタッとくっつくやつで、近所の子どもたちがたくさん集まってきて触らせてもらった。弾は、細長いプラスチックの軸のさきくに、丸くて平たい吸盤がついていた。

ヒカル君は小さいので触らせてもらえないけれど、離れたところで、ハルオちゃんと、黒いおもちゃの鉄砲をずっと見ていた。小学校一年にもなった、年長のハルオちゃんも、珍しそうに集まってくる年下の子どもたちにも、「これはデンキでくっついているんだ」と、得意気に説明した。窓ガラスにくっついた弾がしばらくしてぽとりと落ちるのは、デンキが切れるからなんだ。

弾の先が吸盤になっているので、平らなところにしかくっつかない。

木の幹や塀に撃つてもくっつかないで、弾は惨めに地面に落ちてしまう。それでハルオちゃんは、あっちの家の窓ガラス、こっちの家の窓と、得意気に撃ちまくっていた。ヒカル君は、ハルオちゃんが立派な偉い人に見え、こんなステキなおもちゃを買ってくれるハルオちゃんの家族がうらやましかった。

駅前に佐々木医院という開業医院があった。そのころはまだ自動車は珍しかったが、院長は黒塗りの大きなセダンの車を運転して往診していた。子どもたちは、原っぱで遊んでいた。佐々木医院の車が原っぱの脇の道を通りかかったときに、ハルオちゃんは、車の窓ガラスにむけて弾を発射した。

そして、車がすごいスピードで行ってしまったあと、はっとわれに返つて、「今の車に鉄砲撃っちゃった」と言った。自動車の後部ガラスに弾がくっついたまま、自動車が行き去ってしまったことを子どもたちは理解した。

ハルオちゃんは、ただ一発しかない弾を失って呆然としていた。小さ

い子どもたちは、あつげにとられてハルオちゃんのまわりに集まっていた。

その時、ヒカル君が「デンキが切れて、途中で落ちているかもしれないぞ」と大きな声で叫んだ。「そうだ」といつて子どもたちが、いっせいに、自動車の後を追って走り出した。ヒカル君は小さかったので、走っていく子どもたちについていくことができなかつた。子どもたちはずっとさきまで走って行って見えなくなってしまった。

ヒカル君は、自分の発見に得意になって、叫んだ瞬間には声は甲高く、眉はつり上がっていた。英雄的な気分になんてなっていたのに、その気分は急降下して、子どもたちの後を、わあわあ泣きながら追っつけた。

ヒカル君が野原でひとりで遊んでいると、ハルオちゃんたちがしょぼしょぼうつむきながら帰って来た。弾はどこにも落ちてなかつたそうだ。



遙かなる戦火

内田幸彦

(九) その朝 (開戦)

一九四一年(昭和一六)一二月八日早朝、ラヂオから、緊急ブザーと共に、アナウンサーの興奮した声が流れた。

「臨時ニュースを申し上げます。臨時ニュースを申し上げます。本日未明、我が帝国陸海軍部隊はハワイ諸島において戦闘状態に入りました」

日中戦争(日支事変)において、予想以上に手こずっていただけに、国民はこのニュースを重く受け止め、思わず溜息となった。

重い気分になるのも無理はない。四年目に入る日中戦争で物資は涸渇し、警戒警報・空襲警報に悩まされ、配給の主食二合五勺(三六〇グラム)では、朝夕お粥をすすただけでも足りない飢餓の時代だったから。しかも、不満を口に出

せば憲兵・特高警察の目が光っていて拘束される。

この日の緒戦、ハワイ島真珠湾攻撃は奇襲だっただけに戦果は大きく、わずか二時間でアメリカ戦艦八隻、飛行機一六四機を撃破し、海軍将兵三三〇〇名と住民六八名を殺戮した。日本の損害は飛行機二九機、特殊潜行艇五隻と僅少だった。(ロバート・シャロッド/中野五郎共編『太平洋戦争・上巻』光文社より)

政府・軍部は「神国日本」「東亜の盟主」と国民を煽り立てたが、その後は停滞から硬直状態になり、翌年六月のミッドウェイ海戦を境に戦局は逆転し、敗戦の道を歩むことになった。要するに、線香花火のような開戦だったといえる。

この日、登校すると、朝礼で校長が緊張した面持ちで訓示した。

「諸君も御存知のように、今八日未明、英米軍と戦争になり、未曾有の大戦果を収めました。諸君も今まで以上にお国のため頑張ってください。参戦の詔勅を朗読いたします。心して聞いて下さい。」

(天佑を保有し、万世一系の皇祖を踐(ふ)める大日本帝国天皇は昭(まさ)に忠誠勇武なる汝、有衆に示す。

朕(ちん)茲(ここ)に米国及び英国に戦して戦を宣す。朕が百僚有司は励精職務を奉行し、朕が各(おのおの)其の本分を尽し、億兆一心国家の総力を挙げて征戦の目的を達成するに遺憾なからんことを期せよ。(以下略)

この日は黒い雪雲が垂れ込め、小雪の舞う寒い朝だった。靴は破れ、配給もなく、裸足のまま運動場で詔勅を聞いていたが、寒さで足が痛み、痺れ、まるで他人の足で立っているようだった。

あれから既に六四年も経つ。しかし、当時の記憶は今も鮮明である。

日中戦争の開戦から太平洋戦争が終結するまでの八年間は、私達の青春のすべてだった。楽しかるべき青春の喜びも希望もない暗黒の時代だった。忘れられるものではない思い出である。

だが、国のため、天皇のため、本当に死ぬ気でいた我々には、自由はなかったが、叩き込まれた武士道を基調とする軍人精神は無駄ではなかった。人間の基本を身につけることが出来た。

《君に忠、親に孝》を根幹として人間の基本を身につけたからこそ、戦後急速に経済大国にのし上がった。それは戦中派が中心だったと私は思っている。現代の若者・成人らに、これだけの気力があるかどうか？